



「乳牛の行動に考える、偉大な哲学者の言葉と若者の昼食事情」

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社広島営業所 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

今、日本は空前の哲学ブームだそうで、巷(ちまた)では哲学講座が人気を博(はく)し、書店では哲学の解説本が大変な売れ行きとの事です。十八世紀の哲学者であるイマヌエル・カントは自身の著書にて「真のヒューマニズムと最も調和すると思われる安樂は、善良な交際仲間による美味しい食事の集いである」と記し、友人を招き食事を好んで開催したそうです。カントは食事会が陽気で快活になるよう、幾つかの注意事項を決めていました。それは一、誰でも会話に加われる話題を選ぶ、二、必要無く話題を変えない、三、相手を意固地にさせる雰囲気にならない、四、お互いへの敬意を忘れない、五、笑いのうちにお開きとする、などの内容で、これらは時代を問わず、私たち日常の食事マナーとしても参考になります。

一方、現代社会の若者は、上司や同僚との食事を苦手とする傾向があります。若手会社員への調査では、



六人に一人が「昼食時間を苦痛と思う」と答え、その多くが職場の誰かと一緒に食事をしていました。逆に一人で食べる人は九割が「苦痛は感じない」との回答でした。苦痛の理由として「気の合わない人と食べるのが辛い」「仕事の話が多く落ち着かない」などが挙げられ、専門家はこれの『魔のランチタイム』と呼ばれる現象について、食事内容や場所の問題ではなく「職場での対人ストレス」が根本にあると分析しています。

さて、牛の社会にも序列・順位が存在する

ることが認められています。この序列と採食行動に関するイギリスでの興味深い試験があります。その試験では、まず牛を自由に行動を観察し、それらを社会的に強い牛と弱い牛に分類した上で、弱い牛を対象に①強い牛とともに高品質な餌を食べる、②弱い牛のみ単独で低品質

の餌を食べる、という二つの選択肢を与えました。するとほとんどの牛は②の状況を選択したのです。つまり牛も、食事の内容が悪くとも一人でリラックスして食べる方を好むということ、このことは先の『魔のランチタイム』での会社員の状況を彷彿させます。牛も『職場の上司』との食事を苦痛と感ずるのです。特に牛社会において新人である初産牛は立場が弱く、序列の影響を受け易くなります。よって酪農場では、初産牛は先輩の高齢牛から離し、落ち着いて採食できる環境を用意し、ストレスを減じることが、牛群全体の生産性向上のために重要なのです。

農場の乳牛を見ると、特に本能的な行動において人間と共通する心理状態を垣間見ることがあり、そこにも哲学があります。哲学は難解で高尚な印象を持ちますが、今回取り上げた「食事は苦痛無く、楽しくあるべきこと」の本質への追求は、カントの言葉「真のヒューマニズムと……」と同様、牛の行動にも裏つけされた身近な「哲学」なのです。